

「キリストは初穂となられた」

2023年3月5日

コリントの信徒への手紙一 15：12～28

佐々木 佐余子

今朝は「死者の復活」から学びます。要点を箇条書きにしますと、1つ目は、キリストの復活は認めるが、クリスチャンの復活はない、という人々がいました。キリストは特別な神の子だから復活はあるにしても、我々信者は復活しないと考える人々です。12節をご覧ください。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか」とパウロは聞きます。けれど、そのような信者の復活がなければ、キリストの復活もなかったことになるのです。キリストは復活される前はナザレのイエスであり、人々から預言者イエスだと思われていたのです。2つ目は、もしキリストの復活がなければ、使徒の宣教は無駄であり、偽証人となり、信仰はすべて虚しくなるのです。17節を読むと、「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります」と言っています。3つ目は、キリストは初穂であるということです。20節「眠りについた人たちの初穂となられました」とあるのです。初穂は麦を収穫するとき、最初に取り入れた束を言うのです。その束をまず神に感謝して献げます。これは日本でも古来、風習として行われてきたのです。稲作において、その年に初めて収穫された稲穂を初穂として、神さまに収穫への感謝と稲作への願いを込めて初穂をお供えしてきました。そして、出エジプト記にはこのように記されています。「あなたは土地の最上の初物をあなたの神、主の宮に携えて来なければならない」と。ここから週の初めの最初の日曜日によみがえられたイエスが「初穂」として神に献げられた、とパウロは考えたのです。元々は神の分身が地上に降りて人になられ、人として死んで陰府がえられたのは罪の報いである死を克服するために、罪をやぶるためだったのです。ここで陰府という言葉があります。この陰府についてですが黄泉と書いてよみと読むこともあるのです。ワードを入力すると必ずよみは黄泉と出るのは。陰府とは出ないのです。それでわざわざ陰府と入力して陰府と出します。黄泉（こうせん）は冥途の事であり地獄の事であり、そこは地面の下にあるのです。地面の下に地獄があるのです。黄色は地面を現すのです。陰府も同じような意味ですがイエスも陰府にくだりました。使徒信条にこのようにあります。「キリストは十字架につけられ死にて葬られ陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり」とあります。ここはとても勇気づけられます。あのイエスさまが陰府にまで降りてくださった事です。尊い神の子ですから陰府にまで行かないで、さっと天国に行かれたのかしらと思いきや、そうではなく罪人として陰府に降られたのです。そして、人間と共に一緒に同伴してくださったのです。感激であり勇気づけられます。ところがこの陰府が大変大事な所であると教わりました。この間教会にある本が届きました。別に頼んだ覚えはないので何かしらと思って開けてみると、レムナント出版会から出している『セカンドチャンスの福音』という本でした。括弧して死後の回心の機

会とありました。パウロの復活論から少し離れるとは思いますが、読んでとても参考になったので少し時間を割いてかいつまんでお話をしたいと思います。著者は久保有政さんという牧師さんでした。でもこの方は有名な方なので知っている方もおられるでしょう。テレビにも出演した人です。人は死んでどんな人でも陰府に降るそうです。でも陰府には2つあり、1つは「陰府の慰めの場所」であり、もう1つは「陰府の苦しみの場所」です。金持ちのラザロの話がありますが、ルカによる福音書16章19節でイエスさまが語られました。ある金持ちがいて毎日贅沢に暮らしていたのです。その家の玄関に物乞いをしているラザロという人がおり、食べる物もなく、体中できものがあってそれを犬がなめていたのです。やがてラザロは死んで天使たちによってアブラハムのすぐそばに連れて行かれました。そこは陰府の慰めの場所だったのです。一方、金持ちも死んで葬られ、金持ちは苦しみの陰府に連れて行かれたのです。金持ちは懲らしめの炎の中で生前の自分の人生を思い出し、後悔したり地上の兄弟のことを思い出し心配しました。陰府は譬で言うと、裁判所の留置所のようなのだと言います。一方、地獄は裁判で刑が確定した後の刑務所のようなものだと言います。向こうにアブラハムがいたので金持ちは言いました。「アブラハムよ、お願いします。ラザロをわたしの父の家に送ってください。わたしには兄弟が5人いますが彼らまでこんな苦しみの場所に来ることがないようによく言い聞かせてください」アブラハムは言いました。「彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞いたらいい。」彼は言いました。「いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら彼らは悔い改めるに違いありません」アブラハムは言いました。「もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たとえ誰かが死人の中から生き返っても彼らは聞き入れはしない」と言ったのですが、ここで注目するのは金持ちの改心です。金持ちはこう言っています。「父よ、ではお願いします。ラザロをわたしの父の家に送ってください。わたしには兄弟が5人いますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることがないように、よく言い聞かせてください」と言っていますが、これは陰府に行った金持ちの心情が徹底的に変えられたことを示しているのです。これは金持ちの冷淡の気持ちが愛へと変えられている証左です。彼は冷たい人でしたが、陰府に行ってから変えられました。砕かれた彼は2回目のチャンスを得ました。1回目は天国行きの切符はもらえなかったけれど、2回目は与えられたのです。それをセカンドチャンスというのでした。陰府にはイエスさまがおられるのです。イエスさまはたとえ、様々な事情で地上にあっては主イエス・キリストを信じることもない人でも、或いは福音に出会わなかった人でも、人は死んで陰府に降り、そこでキリストの福音を信じた時、真人間になった時、天国行きの切符を手に入れることが出来ると教えています。人は死んですぐ地獄に行ったり天国に行ったりするのではなく、必ず皆陰府に行くと言われていました。たとえ、地上で教会に行っていなくても、陰府でキリストに出会い改心するなら天国に行けると教えています。これは従来のカトリックの教えとはだいぶ違う信仰です。このような教えですと大分心が楽になります。23節から28節はパウロの終末論になります。終末とはこの世の終わりということです。パウロの時代はこの世の終わりだという危機観がありました。ロ

ローマ帝国の迫害は約300年間続きました。パウロの時代は迫害の初期でした。ネロという皇帝はまともな人ではありませんでした。自分が神ですからクリスチャンは邪宗教を信じているとし、様々な迷信・情報を流しました。今で言ったらフェイクニュースを流したのです。彼らはメシア信仰を持っている。だからこの世を転覆しようとしている、赤い血（葡萄酒）を飲むから人を殺している、お互い兄弟姉妹と呼んでいるから近親相姦をしている、として惑わしました。皇帝の声は神の声です。ローマの大火はクリスチャンのせいになりました。本当はネロが都市再建のため自分で火をつけたのです。そして、迫害の口実にしました。ローマの町が焼かれたころとペトロとパウロが亡くなったころは大体同じころです。そのような状況の中でこの手紙が書かれたのです。終末時には主イエスがこの地上に来臨・再臨されると語ります。24節に「次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます」と言うのです。そして、終末にはもう1つの信仰があります。それは、終末とは主イエスが来臨（再臨ともいう）することなので、イエスさまがもう既にここに来られている、今が終末の時だ、と考えることもできます。神はインマヌエル（神は共にいます）の神であり、それ故、すでに終末を先取りしている信仰です。主イエスはこのように言われました。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。神の時はギリシャ語でカイロスと言いますが、人間の住んでいる時間の流れに仕切りを作り（堰せき）、人が信仰を与えられた時、そこにカイロスの時・神の時と合流となり、人の流れを神の流れに変えられるのです。それによって、人の流れ（自分史）が神の救いの時となるのです。このことはその人にとっては一見わかりません。自分が歩んでいるのですから。でも長い間で見ると、確かに自分が変えられていることに気付くのです。何十年もたつとはっきり認識できるのです。一朝一夕ではわからない事でも長い間で変えられるのです。それを聖化と呼ぶ人もいます。教会に行ってる人も以前より確かに良く変えられている人がおられます。前はああだったのに、と気が付くものです。それはお互いとてもうれしいことです。ヨーロッパ中世の教父でアウグスティヌスと言う人がいました。この人は母の涙の子でした。若い時から放蕩に身を持ち崩し、早熟であり、マニ教を信じていたのです。母は敬虔なクリスチャンでした。しかし、この人に神の時が現れました。自分流で過ごしていた時、神の時カイロスがドッキングしました。実に神の憐れみでした。彼は変えられ、勉強をし、教会に行くようになって改心したのです。そして、女性と別れて修道士になりました。元々優秀だったので階級は上がり叙階を受け聖職者になったのです。生涯、教会の行政、研究と著述に身を捧げました。彼の著した『神の国』は、カルヴァンやフスの宗教改革に道を付けました。神にとってはそのような偉い人でも普通の人でも、改心した人は同じようにとても喜ばれるのです。

さて、コリント書に戻りますと、29節にいけます。「そうでなければ、死者のために洗礼（バプテスマ）を受ける人たちは、何をしようとするのか。死者が決して復活しないのなら、なぜ死者のために洗礼（バプテスマ）など受けるのですか」と聞いています。これはどのようなことなのかよくわからないのですが、ある解説書を読むとこうありました。コリン

ト教会に異邦人がいて、その人はまだ洗礼を受けていないのでした。ところが、自分の愛するクリスチャンの家族が死んでしまった。この異邦人はどうにかして家族と一緒にいたいと思い、受洗したのではないか。と言う説があるのです。でも復活がないのなら受洗しても無駄なことなのです。そして、32節に「単に人間的な動機からエフェソで野獣と闘ったとしたら、わたしに何の得があったでしょう。」と述べています。この野獣とは獣の事でしょうか。大方の考えはこの野獣とは獣の事ではなく、非常事態にパウロがおちいったことを意味するのではないかとされています。「兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました」とあります。これほどの経験はどのような経験なのか。それはパウロがエフェソに赴いた時、デメトリオという銀細工人との間で騒動があったのでした。幸い町の書記官に助けられたのですが、この暴動でもう少しでパウロは捕らえられるところだったのです。ここを譬で言っているのではないかと考える人もおります。

「初穂となられた」という意味はこの世の終わりの時、終末時に最初にキリストが復活されるとパウロは考えているのです。このキリストによってすべての人が生かされることになるのです。さっきの『セカンドチャンスの福音』の中で久保有政先生はイエスを裏切ったユダについて言及しています。彼は自殺したのですが地獄に行くのでしょうか、という問いにこのように答えています。ユダが陰府に行った時、そこでイエスの福音を思い出し、心を入れ替えて改心したなら天国に行けると答えていました。陰府にはまだやり直しのチャンスがあるというのです。天国でユダに会えるのは不思議ではないと言っています。この間の祈禱会ではアガペー論争をしましたが、神は愛のお方なのでした。